

「南仏エクス・アン・プロヴァンス滞在とハン・サンジンの社会学」

My stay in Aix-en-Provence France and Sociology of Han San-jin

荻上チキ責任編集 “ α -Synodos” vol.209 (2016/12/1)

橋本努(Hashimoto Tsutomu)

1. はじめに

2016年の夏から秋にかけての約二か月半、私は南フランスの小さな古都、エクス・アン・プロヴァンスで過ごすことになった。とくにフランスに行く必然性はなかったのだけれども、滞在先では思わぬ出会いがあった。韓国の社会学者ハン・サンジン（韓相震）先生と、その妻で研究仲間でもあるシム・ヨンヒ先生にお会いしたのである。

とりわけハン・サンジン先生は世界的に著名な社会学者であり、韓国では金大中のブレインとして活躍、また最近では第三の政党「国民の党」の設立にも尽力した政治的経験をもっている。日本ではこれほどスケールの大きな社会学者はおそらくいないだろう。お二人との出会いは、これまでの自分の人生に照らしても大きな出来事になったように思う。正確に言えば、出会ったというよりも、正面が全面ガラス張りのアパートで、私は二人の部屋のあいだに挟まれながら、なかば監視状態で生活していた。人口約14万人のフランスの小さな町で、これがどんな体験になったのか。振り返ってみたいと思う。



2. 自由主義の研究プロジェクト

もうだいぶ前になるけれども、私は大学の学部時代にフランス語を履修して、三年次にはシャンパーニュ地方のランスで二週間ほど語学研修をしたこともあった。ところがその

後はフランス語に触れる機会もあまりなく、かれこれ 30 年の年月が経ってしまった。今回、フランス語をそれなりに勉強していったとはいえ、これといってフランスに研究テーマを求めていたわけではなく、ただ西洋世界に対する全般的な関心から赴いた。

機会を与えてくれたのは、フランス人のジル・カンパニョーロ先生。たまたま京都の日文研で数年前に知り合った方で、昨年度は北海道大学に客員研究員として滞在してもいた。彼の所属先が、エクス・マルセイユ大学連合のなかのエクス・アン・プロヴァンス・キャンパスにあったので、私はその近くにある学生寮の一部を借りて、この地に滞在することができた。

カンパニョーロ先生は、三年前から EU の研究資金を得て、リベラリズムと中国に関するテーマで研究プロジェクトを運営していた。LIBEAC (リベアック) と呼ばれるこのプロジェクトは、すでに最終段階に入っていた。2016 年 9 月には最後のワークショップを残すのみで、プロジェクト全体の成果はすでにルートレッジ社から書物として刊行されていた。私は最後のワークショップのみ、このプロジェクトに参加したことになる。プロジェクトはそもそも、中国と自由主義の関係がテーマであり、私の専門とする事柄ではなかったのであるが、ただこのプロジェクトでは、中国を代表する研究者として、韓国人のハン・サンジン先生とシム・ヨンヒ先生を迎えていた点が興味深い。ハン・サンジン先生は北京大学の客員教授であり、中国の研究者を代表する立場にあった。二人の研究関心には当然、韓国社会も射程に入っており、二人の研究成果となった論文は、東京とソウルと北京におけるアンケート調査をもとに、東アジアにおける家族意識の違いを分析するという興味深いものだった。

むろんこの論文は実証分析であり、「リベラリズム」の定義については「家族の縛りが無い個人主義の文化」という具合に、簡単に規定されていた。そのような個人主義の文化は、ハイエクの観点から見れば「大陸型」の個人主義であり、「偽りの個人主義」にすぎないといわれるだろう。むしろ家族ベースの個人主義の方が「真の個人主義」であるというのが、ハイエクの立場であるだろう。いずれにせよ、北京とソウルと東京を比較した場合、このハイエクの考え方に一番近い個人主義文化は、どうも東京にありそうである。とはいっても日本人の家族観は、別の意味で集団主義的な特徴を示しているのだから、日本における個人主義をどのように解釈すべきなのかということが問題になる。また日本では、家族そのものがリベラルな関係に変化している可能性もある。さらなる関心をかき立てられた。

LIBEAC (リベアック) の最終ワークショップは、9 月中旬の 2 日間を用いて行われた。初日はエクス・アン・プロヴァンスにある経済・経営学部棟で行われ、2 日目はマルセイユでこの大学が所有しているある映画館、それも 17 世紀に建てられた世界遺産 (病院) の建物の一角にある映画館で行われた。私の発表は初日の最後で、私は拙著『経済倫理、あなたはなに主義?』に基づくイデオロギー分析を報告した (報告原稿は、このワークショップのために作られたホームページに掲載されている)。そのときの議論から得たものはたくさんあったのであるが、ここではハン・サンジン先生の研究発表について記しておきたい。というのもハン・サンジン先生の報告は、あらゆる点で圧倒的だったからである。

今年でおそらく 70 歳を迎えるハン・サンジン先生は、ソウル大学校の名誉教授であり、現在は北京大学の客員教授でもある。もともとアメリカの南イリノイ大学で、ハーバーマスやフーコーなどの「批判理論」をテーマに博士号を取得している。その後は韓国で 80

年代に市民運動の興隆とともに有名になり、さらに研究のための中民理論研究所を立ち上げると、自前のアンケートに基づく統計データの分析によって、独自の社会学的成果を上げてきた。自分で集めたデータに基づく分析というのは、抗いがたい説得力をもっている。今回の報告でハン・サンジン先生は、ドイツのウルリッヒ・ベックとともに創設した EARN という統計データを共有するネットワークの成果を駆使して、トルコやポーランドなど、いくつかの途上国を含めた六か国の国会議員の意識調査をもとに分析した成果を報告した。テーマは、国会議員のなかで誰が「リベラル平等主義者であるか」というものであり、そのような問いの観点から興味深い分析結果がいろいろと示された。

報告は、分かりやすい英語で、聴衆を魅了するすばらしい語り口であった。全体として一時間程度が割り当てられていたので、後半の 30 分は議論に充てることが望ましかったであろうが、ハン・サンジン先生は、100 枚を超えるパワーポイントのスライドを用意して、「これでもか」というほど徹底した量の分析結果を示された。例えば、リベラルな平等主義に分類される国会議員は、国の将来に対して悲観的であるとか、スウェーデンの国会議員は、ドイツと比べてネオリベラル的な意識が強いといった、さまざまな分析結果である。

とにかくハン・サンジン先生は熱く語るのもので、その語り引き込まれてしまう。内容は膨大であり、一つ一つのデータについて疑問点もわいてくるが、最終的には膨大なデータ量と執念深い分析に圧倒されてしまう。報告はダイナミックに続き、どれも重要な分析であるようにみえてくる。それはおそらく、韓国その他の国で、政党政治は、どのような政治的対立図式を構成することによって民主主義をうまく運営することができるのか、与党に対抗する野党のイデオロギーはどのようにして的確にまとめ上げていくことができるのか、野党は国民のどのような政治的関心に基づいて政策体系を構築すべきなのかといった疑問に対して、示唆的な内容であったからだろう。いわば「パワフルな野党の形成」という課題に、分析のすべてが関係しているようにみえたのである。

ハン・サンジン先生の分析は、単純なアンケート調査と単純な類型学に基づいているとはいえ、分析結果をどのように役立てるのかについての明確な問題関心に支えられているために迫力がある。その価値の迫真性が伝わってくるので、すべての分析結果を真摯に受け止めようという気になってくる。それにしてもハン・サンジン先生は、報告にほぼ一時間を使ったのではないだろうか。この圧倒的なパフォーマンスと容赦のないデータ分析に、私は打ちのめされたのだった。

3. ル・ガザレのパヴィリオン 2

南仏のエクス・アン・プロヴァンスで私が暮らしていたアパートは、街の中心部から南に歩いて 15 分程度の郊外にあった。七棟の団地が並ぶ「ル・ガザレ」地区である。この地区の南側にも、庶民的な規模の団地群が広がっていた。全体として街の南側の郊外は、私が幼少期を過ごした「たまプラーザ団地」を思い出すような雰囲気である。ただこちらの団地はデザイン重視で、とりわけ私が暮らしていたアパート（団地）は、南側の一階と二階部分が全面ガラス張りのメゾネットタイプの部屋であった。入り口のドアの大きさをたたみ一畳分とみなすと、このドアの一畳を含めて、その両隣の二畳分と、ドアの上のた

たみ三畳分もすべてガラス張りになっている。内側からカーテンを閉じることもできるが、昼間は基本的にすべてカーテンを開け、夏は換気のためにドアも空けておかねばならない。それでも風通しが悪く、網戸がないので蚊が入ってくるのだけれども。ただ、これだけデザインにこだわりを持った建物になると、生活していても緊張感があって、美意識が養われるような気持ちになってきた。

私が暮らしていたアパートの内部は、一階部分がデスクとキッチン、二階部分はベッドになっていた。朝の7時から、周囲が暗くなる20:00くらいまでは、基本的にカーテンを開けた状態で暮らすことになる。外からドアに向かって私の右の部屋にはハン・サンジン先生、左の部屋にはシム・ヨンヒ先生が住んでおり、二人は朝から晩まで、私の部屋の前をなんども行き来しては、食事をしたり、会話をしたりしていた。こうしてつまり、私の生活はいつでもつねに覗き込まれている状態がつづいた。

もちろん、お二人の生活もみえてくる。まず朝は、二人は部屋の外で、それぞれ別の時間帯に独自の体操をしている。真剣である。精神の集中を高めているようにみえる。この姿を見るだけで、かなりの刺激を受けることになる。二人はまた、8月のある日から、スポーツ・ジムに通いだした。歩いて15分の街中にあるジムは、8月の一か月であれば人が少ない時期であり、一か月あたり50ユーロで利用できるという。二人はその一か月の間、ほぼ毎日ジムに通っていた。あとで尋ねてみると、毎日17:00まで研究に集中してからジムへと向かい、そこで2-3時間ほど汗を流して21:00ごろに帰宅、いそいで夕食を食べてすぐに寝る、という生活をしてきたようである。毎日このような生活を続けることが、いったいいかにして可能なのか。少しは休んだらよいのではないか、とってしまう。それでも二人は、「すでにお金を支払ってしまったから」と言って、毎日ジムに通う。私が一日の研究を終えて、そろそろ夜はゆっくりしようかなと思うその時間帯に、二人はスポーツで体を鍛えているのだから、圧倒されてしまう。

ハン先生とシム先生と私は、ときどき近くの学生食堂にランチを食べに行ったり、あるいは部屋の前で立ち話をしたり、テーブルと椅子を外に出して簡単なパーティをしたりした。その時にはいつも学問的な会話で盛り上がった。最初にお会いした時に、ハン先生が書いた論文をEメールでいくつか送ってもらったので、私はそれらを集中的に読んで、疑問に感じたことをさまざまな機会に質問することができた。とりわけ印象的だったのは、ハン先生はハーバーマスと親しく、90年代にハーバーマスを韓国に招聘したことをきっかけにして、それからハン先生とシム先生は何度もハーバーマスの私邸を訪れ、対話を繰り返してきたことである。対話はその都度、韓国の新聞等で公表されてきたようであり、その成果の全体は、来年、韓国で出版される計画であるという。ハン先生はほかにも、デリダやボードリヤールにもインタビューを試みたことがあるとおっしゃっていた。

ハン先生がハーバーマスに惹かれるのは、近代の市民社会論という思想そのものに対してである。おそらく他の途上国でも似たような政治的構図になるのであろうが、権威主義的な政権によって経済開発主義の近代化を推し進めていくという歴史段階を「第一近代」とすれば、この権威主義的な政権に異議を申し立てるのは、「市民」の観点から民主的な議論を興す思想であり、この市民の立場が「第二近代」の思想理念として求められる。ハーバーマスの思想は、この「市民社会の担い手の論理」を提供するものとして、政治的に強力な意義をもっているのであろう。ハン先生は韓国における市民社会論の代表的な論客で

あり、ハーバーマスから多くを学んでその政治的な意義をくみ取ろうとしてきた。

ハン先生の中核理論は、「中民理論」と呼ばれる。これについては節を改めて述べるとして、ここではル・ガザレ地区のアパートの思い出というか、ハン先生からいただいた「生活アドバイス」を一つ記しておきたい。

九月の末になって、ハン先生とシム先生は私よりも二週間早く帰国することになった。そのときには、いろいろな置き土産をいただいた。キムチやソバなどの韓国食材から、スパゲッティやクリームチーズにいたるまで、食料は有り余るほどいただいた。加えてハン先生は、私にある方法を示された。「立って研究すると身体にいい」ということで、机の上に比較的大きな書類の山を作って、そこにパソコンを置くべし、というのである。また、立って研究しているときには、足の裏を刺激すべし、ということで、二種類の木の棒をもらった。これらの棒を足元に寝かせて、つねに足踏みしながらパソコンに向かうべし、というわけである。さらにハイチェアも譲ってもらった。ハイチェアに座って、ほとんど立った状態でパソコンの前に向かうべし、というわけである。書類の山、木の棒、ハイチェアはすべて、ハン先生がゴミ置き場から拾ってきたものである。それらを置き土産としていただいて、私は最後の二週間で立ちながら研究することになった。足の裏もかなり刺激したと思う。いったい、一日のなかで何時間、立ちながら研究すべきなのか。ハン先生にたずねてみると、「まだ若いのだから何時間でも可能だ」と言われた。おそらくハン先生は、いまでも立ってパソコンに向かっているのであろう。



4. 「中民理論」とは

ハン先生からメールで送ってもらった諸論文は、どれも読みごたえのあるものだった。文章が簡潔でしかも流暢であり、なによりも論文の構造が頑強である。論理的な展開力がすぐれている。主張も明快で、分析手法も正攻法に基づいている。ストレートな印象を受けた。日本語に訳された論文の一つに、韓相震「日本の戦争の記憶と過去克服の正義」（姜尚中/木宮正史編『日韓関係の未来を構想する』新幹社、71-108 頁、所収）がある。もともとは、ハン先生がソウル大学校で講演して、これに姜尚中がコメントするという企画から生まれた論文であり、東大の紀要にも訳出されている。これを読むと、ハーバーマスのコミュニケーション的行為の理論と、意識調査に基づく分析が、一つの規範的な主張を正当化するために、うまく構成されている。とても説得力のある内容だった。この他、日本語に訳された論文として、韓相震「1980 年における光州抗争と承認をめぐる闘争:人権のコミュニタリアニズム的概念にむけて」（竹内真澄訳、『桃山学院大学社会学論集』桃山学院大学社会学会編、第 34 巻、第 2 号、47～71 頁所収）がある。こちらも読みごたえがある。光州事変を素材にして、なぜ韓国では軍事的な政権に対抗する草の根的な市民社会論が必要なのか、またそれが市民的なコミュニタリアニズムの思想と結びつくのか、時代の文脈のなかで説得的に構成されている。

日本では 80 年代以降、このような軍部の暴走という事態に遭遇していないので、市民社会と民主主義とコミュニティを結びつける思想は、いまいち迫力に欠ける。しかし韓国では事情が異なる。軍部と権威主義的な保守主義に対抗するための、市民主義の思想がぜひとも必要とされたのである。反対に韓国では、日本における 68 年学生運動のような、ラディカルなマルクス主義の思想に導かれた社会運動は貧弱であった。韓国では市民派の思想と運動が、学生運動においても強力であったのであり、その思想的理念はハーバースマスやロールズに学ぶところが大きかったようである。

韓国では、社会運動の理念は「市民社会」にある。そしてその担い手は、台頭する中間層であった。日本では、60-80 年代の中間層は比較的「ノンポリ」であり、画一的な文化のなかで大量生産・大量消費を担う「マス（大衆）」であった。ところが韓国では、中間層は、政治的に高い意識に支えられ、民主化を求める社会運動の担い手となりえた。このような歴史的背景の差は大きいだろう。もちろん韓国でも、すべての中間層が社会運動を支持したわけではない。では 80 年代に民主化を担った中間層とは、どんなタイプの人たちだったのか。ハン先生の「中民理論」はこの現象を社会学的に説明する。その説明によって、中間層は新たな自己像＝アイデンティティを得ることになり、政治的な自己表現を支援されることにもなった。「中民理論」は、80 年代の韓国で、社会的にも学問的にも注目を浴びたのである。

「中民(Joongmin)」とは、大まかに言えば、田舎から都市部に移住して、新たに台頭してきた中間所得層の人々であり、この層に加えて、さまざまな政治的・文化的な草の根運動に加わる若者たちが、そのセグメント（断片）として結合したところに、独自の特徴もっている。韓国ではもともと「民中」という言葉が使われていたが、ハン先生はこの言葉を逆転させて、別の進歩的なイメージを与え、政治の新たな担い手たちの層を構成的な仕方で理論的に把握した。80 年代はこのハン先生の中民理論をめぐる韓国でさまざまな論争が起きたようである。ハン先生が韓国で出版した単著は、80 年代後半から 90 年代前半に集中しているが、どれもこの中民理論をめぐるものである。2015 年になって新たに『中民理論と韓国社会』が刊行され、また 2017 年には中民理論に関する論文集が刊行予定というが、ということはほぼすべての単著がこの中民理論を中心にしている。ただ不思議なのは、日本では誰もこの理論を紹介していないことであり、また部分的にであれ、翻訳もないことである。（この中民理論について、私は英語でいくつかの論文を読みたが、理論的な意味で決定的な論文にはまだ出会っていない。おそらく韓国語からの翻訳を検討することが望ましいのではないか。）

このコミュニケーション不足は、日本社会にとって不幸であるようにもみえる。中民理論は、二大政党制の構築のために、強力な野党を築くうえで役立つだろうからである。権威主義的で保守的な与党に対して、リベラルかつコミュニタリアンで民主的な党を対抗させる場合に、どのような意識をもった人たちがその担い手として構成されるのかについて、中民理論は社会学的な啓蒙を与えてくれる。日本では中間大衆に対する批判の書はあれども、中間層のなかからどのような政治的可能性があるのかについて探った本がない。いまこそ日本でこの中民理論を検討すべきではないか。（ハン先生もやはり、英語で決定版を書くべきだと思う。）

ハン先生は、理論家としてすぐれているだけでなく、民衆に届くメッセージ性をもって

おり、表現力においてもすぐれている。そしてなによりも、彼の顔を真正面から見ると、目が透き通っているようにみえてくる。これは人徳というか、一つの人格のなせる業であろう。ハン先生と話していると、こうして面と向かって議論を続けていけば、さまざまな事柄について、心から分かり合えるような気にさせられる。ハーバーマスが想定するような、透明で無媒介な理解や合意といったものが、調達可能であるように思えてくる。このような透明なコミュニケーションを得意とする人に、私ははじめてお会いした。ハーバーマスのようなコミュニケーション理論、あるいは「分かり合い・分かち合い」の諸思想に対して、私はもっと積極的に受け入れてもよいという気になってきた。だが他方で、この思想は、透き通ったコミュニケーションが下手な人によって主張されると台無しになってしまうことも理解したのだった。



5. フランスのリバタリアニズム

この他、私はエクス・アン・プロヴァンスで、思いもかけず、オーストリア学派やリバタリアニズムの関係者たちとお会いする機会を得た。LIBEAC で知り合ったピノー・サンティアゴさんは、現在、ハイエクとポランニーに関する博士論文を執筆中。彼と一度お会いして議論する機会があった。すると彼の紹介で、今度は別の日にエマニュエル・マーティン（本名はデバザン）とランチをする機会があった。マーティンは、ミュージシャンでもあり、私は彼からファースト・アルバムをいただいた。基本的にロックであり、マーティンは本当に声に恵まれているので、作曲もよいけれども、なによりその声に魅了されてしまう。ユー・チューブや彼の音楽専用ホームページでも聴くことができるので、ぜひご視聴いただきたい (debazine.com)。反社会主義、反全体主義のメッセージが多く、真にリバタリアンな活動家であることが分かる。彼は大学では常勤職ではないが、インターネット上の大学で活躍したり、ウォール・ストリート・ジャーナルなど様々な雑誌に記事を寄稿している。記事は魅力的な英語表現であり、リバタリアニズムの価値を訴え続けている。

別の日には、リバタリアニズム関係でよく集まっているという 20 代から 30 代の若者たちと夕食を共にすることができた。かなり頭がいい人たちという印象で、専門的な議論で盛り上がった。最後のバーでお会いしたゴルバチェンコ（ロシア出身）は天才肌であると

思う。

もう退官されたようだが、エクス・アン・プロヴァンスでは Serge Schweitzer 先生がリバタリアニズムのカリスマ的な先導者であったようで、しかし英語では本を書いていないという。若手のリバタリアンたちは現在、「Institut Coppet (フランスにおける自由主義の研究組織)」という組織でさまざまな情報を発信している。ネット情報は以下の通りである。<http://www.institutcoppet.org/>

<http://www.coppetinstitute.org/> (同組織の英語での紹介はこちら)

私は若手のリバタリアンたちに「誰を尊敬しているのか」と尋ねたところ、まずフレデリック・バステア(Frédéric Bastiat)、そしてパスカル・サリン(Pascal Salin)、あるいは「各人に核兵器を」という過激な主張をするバーナード・ルムニシュール(Bertrand Lemennicier)などの名前を挙げてくれた。若手の研究者たちはいま、フランスでネット上のサイバー大学を立ち上げ、リバタリアニズムの思想を布教しようとしている。日本でもそのような動きはないのか、と尋ねられたけれども、残念ながら日本でこれほど濃密なネットワークはないだろう。パリでは毎年、学生のリバタリアニズム組織が会合を開き、ゲストスピーカーを呼んで勉強会が開かれているという。

もう 15 年くらい前になるが、私はニューヨークで、二人のフランス人にお会いした。二人ともエクス・アン・プロヴァンスの大学で博士課程に在籍していた。それでいつか二人を訪ねたいと思っていた。けれども二人は、すでにエクス・アン・プロヴァンスにはいなかった。ニールは故郷に帰ったようであり、エリザベス・クレッケは芸術家としてスペインで活躍している、とのことだった。この 15 年間に、二人に生じた人生の苦難については、エマニュエル・マーティンが詳しく教えてくれた。私は身が引き裂かれるような思いをした。

この他、私はフランス滞在中に、パリ在住のジャーナリストからメールでインタビューを受けることになった。グレゴワール・カンローブさん。彼の名前でネット検索してみると、たくさんの記事やインタビューを見つけることができる。奇才であり、私への依頼の直前のインタビューでは、パレスチナ出身の反イスラム運動家に対して、トクヴィルの本から引用しつつ質問しているので驚いた。私に対する質問にも、『葉隠』や『金閣寺』からの引用があり、この人の教養の広さを知った。グレゴワールさんと面識があるマークさんによると、グレゴワールは知的起業家で、いろいろな新しいことに挑戦しているという。考えてみれば、メールでやりとりするようになった現代に、メールでのインタビューは適しているはずである。近く、私の応答はネット上の雑誌にアップされるだろうと思うので、ご参看願いたい。それにしてもこのインタビューは、分量が論文一本分に値するのだから、大変な経験だった。それでもグレゴワールの質問はウィットに富んでいて、いろいろと真剣に考える機会を与えられた。

およそ以上である。他にも書きたいことがいろいろあるのだけれども、エクス・アン・プロヴァンスで体験したり耳にしたりした情報、それから、滞在に関する私の生活メモについては、ちかく自分のホームページで紹介したいと思う。